

番号	指摘箇所	
	頁	行

92	256 - 259	
----	-----------------	--

**指摘事由** 学習指導要領に定める「内容」(6)のウの「社会と個人、世界の中の日本、地域社会の歴史と生活などについて、適切な主題を設定させ、資料を活用して探究し、考えを論述する活動を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」及び「内容の取扱い」(2)のアの「……資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を段階的に高めていくこと」に照らして、扱いが不適切である。

[p. 256~257]

歴史の論述

もう一つの戦争

**学習のねらい** これまで、それぞれの時代の学習を通し、資料にもとづいて歴史が考察され叙述されていることを学びました。ここでは、これまでに学んできたことをふまえ、テーマ(主題)を設定し、そのテーマに対する考察を論述してみましょう。

授業もだいぶん順調にすすんできたころ、先生は「歴史の論述」という課題を出しました。そこで2人は「論述」用に資料などを集めはじめました。

このころ、「論述」を書くために図書館で調べたり、今のように休み時間もいろいろな本を読んでいるようだけど、どんなテーマで書いているの。

秘密戦のことを書いているの。

聞き慣れない言葉だけれど、秘密戦って何。

戦争の表舞台は武力戦だけど、その背後にはもう一つの戦争、秘密戦が付きものなのよ。秘密戦というのは、敵国内を混乱させる戦争のやりかたで、スパイ活動などがよく知られているわ。日本でも具体的には、スパイの活動道具、風船爆弾などの新兵器の開発、偽札づくりなどをおこなっていたのよ。

へえ、おもしろそうだね。風船爆弾って聞いたことがあるけど、偽札をつくっていたなんておどろくね。ところで、どうして秘密戦のことを知ったの。

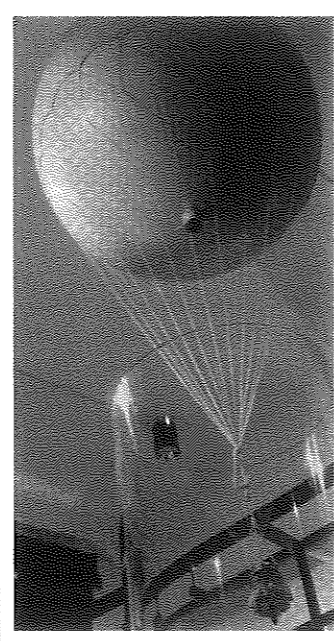
夏休みに偶然、知ったの。

戦争は武力での戦いばかりではなかった

テーマ：  
もう一つの戦争=秘密戦の研究と開発は、  
どのようにおこなわれ、どのようにして解明されたのか

はじめに—テーマ設定の動機・理由

大学のオープンキャンパスにいったさい、そのキャンパスに登戸研究所資料館というのがあったので、軽い気持ちで見学した。そうしたら、教科書には書かれていない戦争の様子や、かくされていた登戸研究所のことを市民・高校生が解明したことを展示していた。その内容におどろき興味をもち調べることにした。



図版①

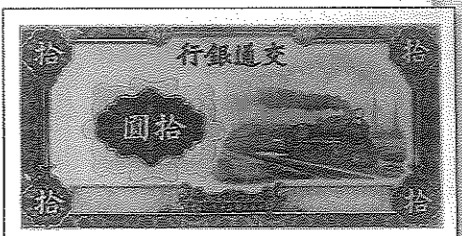
明治大学平和教育登戸研究所資料館内の展示  
明治大学は1950年ごろ、登戸研究所跡地のうち約4分の1を国から購入し、以後、生田キャンパスとして使用してきた。資料館は、キャンパスに残る当時の建物を整備し、2010年に開館した。展示されている風船爆弾は10分の1の復元模型。

原文

1. 秘密戦の研究・開発と登戸研究所

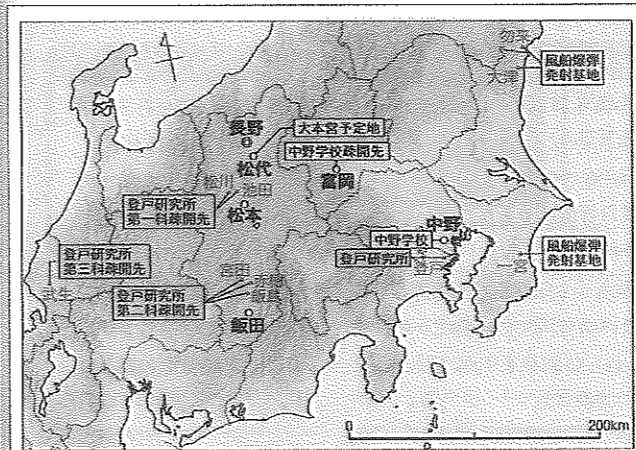
見学した資料館のもとになった登戸研究所は、現在の神奈川県川崎市生田にあった。勤務員は最大時1000人をこえていた。この研究所は、東京の戸山ヶ原にあった陸軍科学研究所(1919年設立)を拡充したもので、当時、参謀本部に直属する陸軍最大の秘密戦の研究機関であった。

このような研究所が重視された背景には、第1次世界大戦後、各国で秘密戦の研究と、毒ガスなど科学技術の兵器への活用が重要視されたことにあった。日本では、1937年の日中戦争開始から秘密戦が本格的にすすめられていくようになった。戦争当初、陸軍首脳部は中国が一撃で屈服すると考えていたが、実際はそうはならなかった。日本軍は1938年に約68万人をこえる兵力を投入しながらも苦戦し、戦争は泥沼化した。戦局の打開が困難となった陸軍は、秘密戦に活路をみだそうとした。そこで、手狭になった陸軍科学研究所の移転先をさがし、1939年に陸軍科学研究所登戸出張所(通称、登戸研究所)を設立した。以後、登戸研究所はスパイを養成する中野学校(1940年設立)と密接な関係をもち、秘密戦の研究をおこなった。



登戸研究所で印刷された裁断前の中国紙幣  
中国での通貨単位は「元」であるが、「元」は発音が同じ「圓(円)」と表示された。  
偽造法幣は総計で約40数億元、そのうち現地で流通したものは約25億元と推定されている。

図版②



登戸研究所関係図

陸軍登戸研究所は四科にわかれており、第一科は物理的兵器・風船爆弾の研究開発、第二科は毒性化合物の研究、スパイ用の道具、缶詰に偽装した爆弾などの開発、第四科はそれらの製造、第三科は偽札の印刷製造をおこなった。第一科、第二科、第三科はそれぞれ科ごとにまとまって疎開した。

図版③

1941年にアジア太平洋戦争が開始されると、登戸研究所は毒性化合物の研究、生物・化学兵器、スパイ用の秘密インキ・秘密カメラ、缶詰に偽装した爆弾、毒物注射器、風船爆弾、偽札など多様な秘密兵器の開発・製造をおこなった。このうち、風船爆弾は、和紙をコンニャク糊ではりあわせ、気密にした直径10メートルの風船に水素ガスを充填し、時限信管と焼夷弾または爆弾を搭載した兵器であった。これが偏西風(ジェット気流)を利用し50~60時間とび、約8000キロへだてたアメリカ本土を攻撃した。また、偽札は中国国民政府の正規の流通紙幣である「法幣」を大量に偽造したもので、流通させ物資の調達などをした。

研究所は戦局が悪化すると空襲を回避するため、長野県などに大部分が1945年春に疎開した。日本敗戦の8月15日朝、陸軍は人体実験・細菌戦をおこなっていた731部隊などと同様に、登戸研究所に証拠の隠滅をいちちはやく命じた。登戸研究所では偽札や書類を燃やす黒煙が2週間にわたりのぼった。

番号	指摘箇所	
	頁	行
92	256	
続き	-	
	259	

歴史の論述  
もう一つの戦争

**学習のねらい** これまで、それぞれの時代の学習を通し、資料にもとづいて歴史が考察され叙述されていることを学びました。ここでは、これまでに学んできたことをふまえ、テーマ(主題)を設定し、調べたことをもとに「歴史の論述」にとりこんでみましょう。

授業もだいたい順調にすすんできたころ、先生は「歴史の論述」という課題を出しました。それぞれが「社会と個人」の関係、「世界と日本」の関係、「地域社会の歴史と生活」などのさまざまなテーマを設定し、探求したこと・考えたことを「論述」という課題です。表現するさいには、口頭での発表、レポート作成、新聞の作成・掲示、コンピュータを用いたのプレゼンテーションなどいろいろな技法を活用してみよう、ともいわれました。以下は「論述」作成の一例です。



このころ、「論述」用に図書館で調べたり、今のように休み時間もいろいろな本を読んでいるようだけど、どんなテーマで調べているの。



秘密戦のことを調べているの。



聞き慣れない言葉だけれど、秘密戦って何。



戦争の表舞台は武力戦だけど、その背後にはもう一つの戦争、秘密戦がつきものなのよ。秘密戦というのは、敵国内を混乱させる戦争のやりかたで、スパイ活動などがよく知られているわ。日本でも具体的には、スパイの活動道具、風船爆弾などの新兵器の開発、偽札づくりなどをおこなっていたのよ。



へえ、おもしろそうだね。風船爆弾って聞いたことがあるけど、偽札をつくっていたなんておどろくね。ところで、どうして秘密戦のことを知ったの。



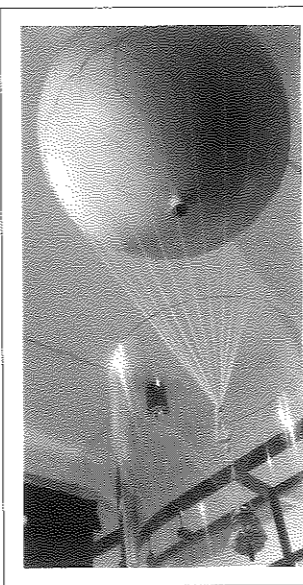
夏休みに偶然、知ったの。それから気になって調べているの。

戦争は武力での戦いばかりではなかった

テーマ：  
もう一つの戦争＝秘密戦の研究と開発は、  
どのようにおこなわれ、どのようにして解明されたのか

1. テーマ設定の動機・理由

大学のオープンキャンパスにいったさい、そのキャンパスのぼりと  
に登戸研究所資料館というのがあったので、軽い気持ちで見学した。そうしたら、教科書には書かれていない戦争の様子や、かくされていた登戸研究所のことを市民・高校生が解明したことを展示していた。その内容におどろき興味をもった。



明治大学平和教育登戸研究所資料館内の展示  
明治大学は1950年ごろ、登戸研究所跡地のうち約4分の1を国から購入し、以後、生田キャンパスとして使用してきた。資料館は、キャンパスに残る当時の建物を整備し、2010年に開館した。展示されている風船爆弾は10分の1の復元模型。

図版①

修正文

2. 秘密戦の研究・開発と登戸研究所

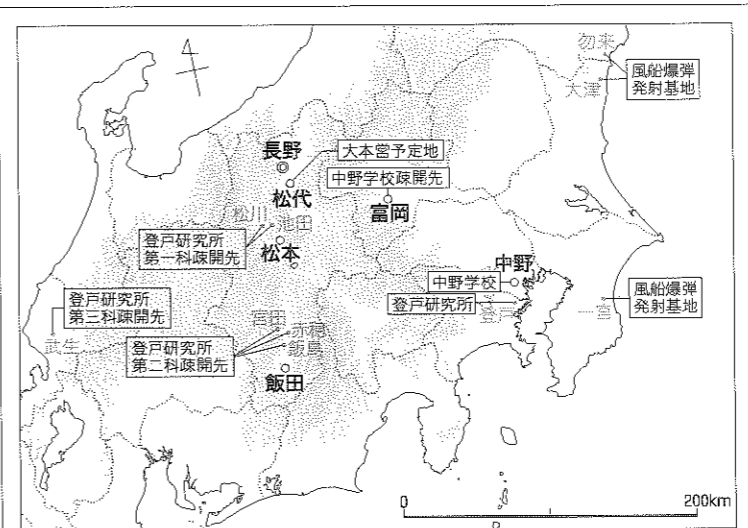
見学した資料館のもとになった登戸研究所は、現在の神奈川県川崎市生田にあった。勤務員は最大時1000人をこえていた。この研究所は、東京の戸山ヶ原にあった陸軍科学研究所(1919年設立)を拡充したもので、当時、参謀本部に直属する陸軍最大の秘密戦の研究機関であった。

このような研究所が重視された背景には、第1次世界大戦後、各国で秘密戦の研究と、毒ガスなど科学技術の兵器への活用が重要視されたことにあった。日本では、1937年の日中戦争開始から秘密戦が本格的にすすめられていくことになった。戦争当初、陸軍首脳部は中国が一撃で屈服すると考えていたが、実際はそうはならなかった。日本軍は1938年に約68万人をこえる兵力を投入しながらも苦戦し、戦争は泥沼化した。戦局の打開が困難となった陸軍は、秘密戦に活路をみだそうとした。そこで、手狭になった陸軍科学研究所の移転先をさがし、1939年に陸軍科学研究所登戸出張所(通称、登戸研究所)を設立した。以後、登戸研究所はスパイを養成する中野学校(1940年設立)と密接な関係を持ち、秘密戦の研究をおこなった。



登戸研究所で印刷された裁断前の中国紙幣  
中国での通貨単位は「元」であるが、「元」は発音が同じ「圓(円)」と表示された。  
偽造法幣は総計で約40数億元、そのうち現地で流通したものは約25億元と推定されている。

図版②



登戸研究所関係図  
陸軍登戸研究所は四科にわかれており、第一科は物理的兵器・風船爆弾の研究開発、第二科は毒性化合物の研究、スパイ用の道具、缶詰に偽装した爆弾などの開発、第四科はそれらの製造、第三科は偽札の印刷製造をおこなった。第一科、第二科、第三科はそれぞれ科ごとにまとまって疎開した。

図版③

1941年にアジア太平洋戦争が開始されると、登戸研究所は毒性化合物の研究、生物・化学兵器、スパイ用の秘密インキ・秘密カメラ、缶詰に偽装した爆弾、毒物注射器、風船爆弾、偽札など多様な秘密兵器の開発・製造をおこなった。このうち、風船爆弾は、和紙をコンニャク糊ではりあわせ、気密にした直径10メートルの風船に水素ガスを充填し、時限信管と焼夷弾または爆弾を搭載した兵器であった。これが偏西風(ジェット気流)を利用し50～60時間とび、約8000キロへだてたアメリカ本土を攻撃した。また、偽札は中国国民政府の正規の流通紙幣である「法幣」を大量に偽造したもので、流通させ物資の調達などをした。

研究所は戦局が悪化すると空襲を回避するため、長野県などに大部分が1945年春に疎開した。日本敗戦の8月15日朝、陸軍は人体実験・細菌戦をおこなっていた731部隊などと様々に、登戸研究所に証拠の隠滅をいちはやく命じた。登戸研究所では偽札や書類を燃やす黒煙が2週間にわたりたちのぼった。

番号	指摘箇所	
	頁	行
92	256	
続き	-	
	259	

原文

[p. 258~259]

《資料館の方が教えてくれました》

風船爆弾

アメリカ軍による本土空襲がはげしくなるなかで、当時の日本では、アメリカ本土まで飛行できる長距離爆撃機はなかった。そこで、空襲への対抗手段、対アメリカ戦での決戦兵器として研究・開発されたのが風船爆弾であった。風船爆弾は当初、牛疫ウイルスという病原菌を搭載する生物兵器として開発され、高度維持装置やラジオドンデ(高層気象観測用無線発信器)など当時の世界の最新技術がもちいられた。最終的に生物兵器は搭載されなかったが、風船は膨張からくる破裂をふせぐため、コウゾを原料とする和紙で製作されることになった。その風船製作に多くの女子学徒が動員された。女子学徒が動員されたのは製作のさい、できるだけ和紙をいためないように、指先がしなやかでやわらかい若い女性が求められたためであった。製作された約9300個の風船爆弾は1944年11月から翌年4月までの間に、千葉県上総一宮、茨城県大津、福島県勿来の発射基地よりアメリカ本土へと放球された。そのうち約1000個がアメリカ本土に到達したと推定され、山火事をおこしたほか、オレゴン州では6人の犠牲者を出している。



動員されたのは  
きみたちと同じ  
年ごろの女子学徒  
だったんだよ。

偽札の製造

登戸研究所での偽札製造の目的は、①敵である中国国民政府(蒋介石政権)の抗戦力を弱体化させるために、法幣の価値を減じること、②偽札で日本軍が必要とする物資を現地で調達することにあった。1939年から研究をすすめたが、当初は精巧さに欠ける偽札であり、使い物にはならなかった。しかし、1941年にアジア太平洋戦争に突入し、日本軍が同年12月に香港を占領すると、中国国民政府の造幣所から印刷用原板と大量の原紙をもちだし、登戸研究所に送った。以後、登戸研究所では本物とかわらない偽札をいくらかでも印刷できるようになった。これらの偽札を中国で流通させ、戦争に必要な物資の購入、買収工作資金などに使った。



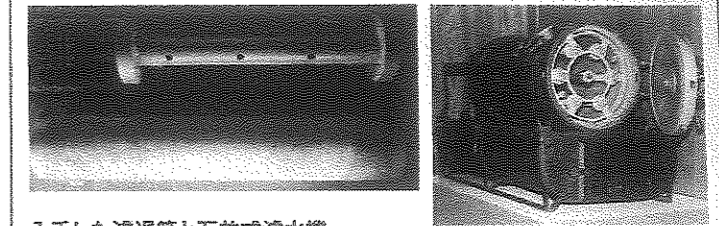
偽札が流通  
した理由が  
わかったわ。

2. 登戸研究所の謎を解明した市民・高校生の活動と保存の動き

敗戦時に証拠が隠滅された登戸研究所の全体像は、秘密保持が徹底していたため勤務員にも不明であり、謎のままであった。そうしたなか、1980年代になると、登戸研究所を調べようとした川崎市民が、文献をさがしたり、関係者へのアンケート調査などを実施した。その結果、提供された資料の分析などから、研究所の全体像がしだいに明らかになった。

川崎市民による解明がすすめられていたころ、長野県伊那谷の赤穂高校平和ゼミナールの生徒たちも調査をはじめていた。平和ゼミナールの生徒たちは、1989年2月、登戸研究所が敗戦の半年前、自分たちが住む窮乏

根市などに疎開してきたと聞いた。そこで7月の文化祭での研究発表のテーマに選び、調べることにした。文化祭での展示・発表後も、当時を知る人々から聞き取り調査をすすめ、元技術将校の家にあった「軍事秘密」と刻印された筒を入手した。そして同年10月、川崎市にある法政第二高校(法政二高)平和研究会との交流会でその筒を提示し、その鑑定の依頼をゆだねた。



入手した濾過筒と石井式濾水機

のちに731部隊をひきいた石井四郎は、1932年から細菌戦の研究を開始するとともに、飲料水を確保する研究もおこない、6本の濾過筒を組みこんだ石井式濾水機を開発した。登戸研究所の疎開とともに、飲料水を確保するため長野県に大量の濾過筒が運ばれた。

図版④

法政二高平和研究会の生徒たちも、登戸研究所跡地の調査や聞き取りをおこなっていた。依頼された筒は、731部隊をひきいた石井四郎に関わる濾過筒であることを731部隊関係の研究者が鑑定した。さらに、平和研究会の生徒たちはその濾過筒を製造したメーカーを探しだし、その会社が現在も存続していることを知った。そこで訪問し、戦争中の石井式濾水機があることをみつけた。その後、登戸研究所への関心が高まるにつれ、戦争遺跡として保存を求める市民運動が展開されている。明治大学生田キャンパスには現在、研究所関連のものとして、当時の動物慰霊碑・神社・弾薬庫・消火栓などが残されている。



図版⑤

動物慰霊碑

登戸研究所では、青酸カリ・ヘビ毒などの生物化学兵器を開発しており、完成すると中国で人体実験をした。高さ3メートルにも達する巨大な石碑に「動物慰霊」と刻まれているが、ここでひそかに、その犠牲者の「慰霊」していたのではないかと考えられている。

3. 考察

日中戦争は泥沼化した。陸軍は、秘密戦に活路をみいだそうとし、当時の最先端の科学技術をもとに、生物・化学兵器、偽札製造、風船爆弾の研究開発などをすすめた。それらになったのが登戸研究所であった。この研究所での研究開発、そして開発兵器などの使用こそが秘密戦そのものであり、日本軍がおこなった「もう一つの戦争」にほかならなかった。それが、敗戦後、登戸研究所が証拠の隠滅をいちはやく命じられた理由にちがいないと思った。

また、登戸研究所の謎がどのようにして解明されたかを調べるなかで、20数年前の高校生の活動と熱意により、研究所当時のことについてかた口をとざし戦後を生きてきた人がようやく語りはじめた、ということを知った。そのことを赤穂高校平和ゼミナールの代表者は次のように書いている。

「次の言葉がいまでも忘れることができません。/『もう大人には喋りたくない、君たち高校生にだけは話しておきたい』/この言葉を聞いたとき、涙がでるほど嬉しかったです。」

私たちはまだうまれていないので、これも歴史なのだと思います。登戸研究所の解明の歴史をたどると、私たち今の高校生もテーマを見つけ、みんなで調べ解明できることがあるにちがいない。私たち高校生は微力であるが、けっして無力でないことがわかった。

番号	指摘箇所	
	頁	行
92	256	
続き	-	
	259	

修正文

《資料館の方が教えてください》

風船爆弾

アメリカ軍による本土空襲がはげしくなるなかで、当時の日本では、アメリカ本土まで飛行できる長距離爆撃機はなかった。そこで、空襲への対抗手段、対アメリカ戦での決戦兵器として研究・開発されたのが風船爆弾であった。風船爆弾は当初、牛疫ウイルスという病原菌を搭載する生物兵器として開発され、高度維持装置やラジオゾンデ(高層気象観測用無線発信器)など当時の世界の最新技術がもちいられた。最終的に生物兵器は搭載されなかったが、風船は膨張からくる破裂をふせぐため、コウゾを原料とする和紙で製作されることになった。その風船製作に多くの女子学徒が動員された。女子学徒が動員されたのは製作のさい、できるだけ和紙をいためないように、指先がしなやかでやわらかい若い女性が求められたためであった。製作された約9300個の風船爆弾は1944年11月から翌年4月までの間に、千葉県上総一宮、茨城県大津、福島県勿来<sup>なごき</sup>の発射基地よりアメリカ本土へと放球された。そのうち約1000個がアメリカ本土に到達したと推定され、山火事をおこしたほか、オレゴン州では6人の犠牲者を出している。



動員されたのはきみたちと同じ年ごろの女子学徒だったんだよ。

偽札の製造



偽札が流通した理由がわかったわ。

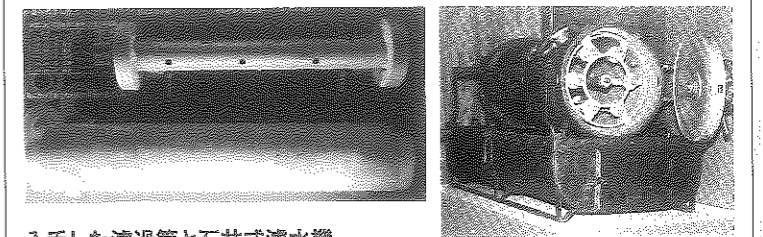
登戸研究所での偽札製造の目的は、①敵である中国国民政府(蔣介石政権)の抗戦力を弱体化させるために、法幣の価値を減じること、②偽札で日本軍が必要とする物資を現地で調達することにあつた。1939年から研究をすすめたが、当初は精巧さに欠ける偽札であり、使い物にはならなかった。しかし、1941年にアジア太平洋戦争に突入し、日本軍が同年12月に香港を占領すると、中国国民政府の造幣所から印刷用原板と大量の原紙をもちだし、登戸研究所に送った。以後、登戸研究所では本物とかわらない偽札をいくらかでも印刷できるようになった。これらの偽札を中国で流通させ、戦争に必要な物資の購入、買収工作資金などに使った。

3. 登戸研究所の謎を解明した市民・高校生の活動

敗戦時に証拠が隠滅された登戸研究所の全体像は、秘密保持が徹底していたため勤務員にも不明であり、謎のままであった。そうしたなか、1980年代になると、登戸研究所を調べようとした川崎市民が、文献をさがしたり、関係者へのアンケート調査などを実施した。その結果、提供された資料の分析などから、研究所の全体像がしだいに明らかになった。

川崎市民による解明がすすめられていたころ、長野県伊那谷の赤穂高校平和ゼミナールの生徒たちも調査をはじめていた。平和ゼミナールの生徒たちは、1989年2月、登戸研究所が敗戦の半年前、自分たちが住む駒ヶ

ね根市などに疎開してきたと聞いた。そこで7月の文化祭での研究発表のテーマに選び、調べることにした。文化祭での展示・発表後も、当時を知る人々から聞き取り調査をすすめ、元技術将校の家にあった「軍事秘密」と刻印された筒<sup>図版⑤</sup>を入手した。そして同年10月、川崎市にある法政第二高校(法政二高)平和研究会との交流会でその筒を提示し、その鑑定の依頼をゆだねた。



入手した濾過筒と石井式濾水機

のちに731部隊をひきいた石井四郎は、1932年から細菌戦の研究を開始するとともに、飲料水を確保する研究もおこない、6本の濾過筒を組みこんだ石井式濾水機を開発した。登戸研究所の疎開とともに、飲料水を確保するため長野県に大量の濾過筒が運ばれた。

図版⑥

法政二高平和研究会の生徒たちも、登戸研究所跡地の調査や聞き取りをおこなっていた。依頼された筒は、731部隊をひきいた石井四郎に関わる濾過筒であることを731部隊関係の研究者が鑑定した。さらに、平和研究会の生徒たちはその濾過筒を製造したメーカーを探しだし、その会社が現在も存続していることを知った。そこで訪問し、戦争中の石井式濾水機があることをみつけた。その後、登戸研究所への関心が高まるにつれ、戦争遺跡として保存を求める市民運動が展開されている。明治大学生田キャンパスには現在、研究所関連のものとして、当時の動物慰霊碑<sup>図版⑦</sup>・神社・弾薬庫・消火栓などが残されている。

動物慰霊碑

登戸研究所では、青酸カリ・ヘビ毒などの生物化学兵器を研究開発しており、完成すると中国で人体実験をした。高さ3メートルにも達する巨大な石碑に「動物慰霊」と刻まれているが、ここでひそかに、その犠牲者の「慰霊」をしていたのではないかと考えられている。



図版⑦



なるほど、「もう一つの戦争」というテーマで、戦争と科学技術や地域社会とのかかわりを調べているんだね。でも、調べてわかったことなどをどのように構成するのか、どんな表現技法を使うのかも問われるよね。その2つがこれからのポイントかなあ。



「論述」なので、最初にテーマ設定の理由や動機、2つ目に展開として調べ知ったこと、3つ目に結論としてそのテーマのもつ意義という構成で作成しなくては、と考えているの。具体的には私の場合、最初に①テーマ設定の動機、展開としては調べたことをいかし②登戸研究所とは?、③風船爆弾と偽札、④解明された登戸研究所の謎、結論は主として⑤私なりに考察した市民・高校生の活動とその意義、という構成で作成しプレゼンテーションをしてみようと思っているわ。撮影してきた多くの写真もあるし。どうかしら。



僕はレポートにしようと考えているけど…。そうか、プレゼンもいいね。プレゼンが楽しみだね。

番号	指摘箇所		原文	修正文																		
	頁	行																				
93	260	年表	<p>指摘事由 誤りである。</p> <p>『日本書紀』</p>	『日本書紀』																		
94	262	年表	<p>指摘事由 1336年「建武式目」制定を室町時代のはじまりとしており、77ページ12～13行目「1338（延元3，暦応元）年，尊氏は征夷大將軍になり，室町幕府をひらいた」との関連が理解し難い。</p> <table border="1" data-bbox="608 882 1127 976"> <tr> <td>1335</td> <td>2</td> <td>中先代の乱。足利尊氏反乱</td> </tr> <tr> <td>1336</td> <td>建武</td> <td>建武式目制定。後醍醐天皇，吉野に移る（南北朝対立，～92）</td> </tr> <tr> <td>1338</td> <td>暦応</td> <td>尊氏，征夷大將軍となり，室町幕府をひらく</td> </tr> </table> <p>[関連修正（上記修正にともなう記述の整合性）] [p.77 8～15行]</p> <p>尊氏は光明天皇を即位させ（北朝），政治方針を示した建武式目を発表した。他方，後醍醐天皇は吉野にのがれた（南朝）。こうして建武の新政は3年で崩壊した。</p> <p>1338（延元3，暦応元）年，尊氏は征夷大將軍になり，室町幕府をひらいた。以後，南北両朝の擁立を名目に，貴族や武士の抗争が約60年間にわたって継続し，民衆を動乱の渦中にまきこんで，戦禍が列島の全域をおおった。</p>	1335	2	中先代の乱。足利尊氏反乱	1336	建武	建武式目制定。後醍醐天皇，吉野に移る（南北朝対立，～92）	1338	暦応	尊氏，征夷大將軍となり，室町幕府をひらく	<table border="1" data-bbox="1825 882 2315 976"> <tr> <td>1335</td> <td>2</td> <td>中先代の乱。足利尊氏反乱</td> </tr> <tr> <td>1336</td> <td>建武</td> <td>建武式目制定。後醍醐天皇，吉野に移る（南北朝対立，～92）</td> </tr> <tr> <td>1338</td> <td>暦応</td> <td>尊氏，征夷大將軍となる</td> </tr> </table> <p>尊氏は光明天皇を即位させ（北朝），政治方針を示した建武式目を発表した。他方，後醍醐天皇は吉野にのがれた（南朝）。こうして建武の新政は3年で崩壊した。1338（延元3，暦応元）年，尊氏は北朝から征夷大將軍に任じられた。</p> <p>朝廷の分裂後，南北両朝の擁立を名目に，貴族や武士の抗争が約60年間にわたって継続し，民衆を動乱の渦中にまきこんで，戦禍が列島の全域をおおった。</p>	1335	2	中先代の乱。足利尊氏反乱	1336	建武	建武式目制定。後醍醐天皇，吉野に移る（南北朝対立，～92）	1338	暦応	尊氏，征夷大將軍となる
1335	2	中先代の乱。足利尊氏反乱																				
1336	建武	建武式目制定。後醍醐天皇，吉野に移る（南北朝対立，～92）																				
1338	暦応	尊氏，征夷大將軍となり，室町幕府をひらく																				
1335	2	中先代の乱。足利尊氏反乱																				
1336	建武	建武式目制定。後醍醐天皇，吉野に移る（南北朝対立，～92）																				
1338	暦応	尊氏，征夷大將軍となる																				